

# 女性として生きていた私

その1

レスリー・ルング

(リバイター・リーグ代表)

昨年11月にシンガポールからレスリー・ルング氏をゲストを迎えて、沖縄と東京で講演会が開かれました。レスリーさんには、男性として生まれたことに悩み苦しむ、女性として生きようと決意しましたが、手術の一手手前でやめた経緯があります。

レスリーさんの書かれた「フリーダム・オブ・チョイス（『選択の自由』という本の中から、数回に分けてそのお話を紹介します。



私はいつも、「自分はどのように普通ではないのか」、いわゆる「女っばい」のか、と悩んでいました。育ちのせいだという人もおり、友だちのせいだと言う人もおり、家系のせいだと言う人もいます。

私の姓「ルング」は、漢字で龍と書きます。ドラゴンを意味

女っばい自分について、「女性の多すぎる家系なので、自分は精神的に去勢されてしまったのか。男として頑張らねばというプレッシャーに負けたのだろうか」と自問したものです。

する字で、荘厳な力、また男性の象徴です。家族の中で、一人が家系を継承できる唯一の男性でした。

祖父には三人の息子がいましたが、長男には娘ばかり七人、次男にもやはり娘だけ五人、三男である私の父には子どもが二人おり、最初が長女、つまり私の姉で、最後の最後に私が生まれたのです。十四番目に、やっとのこと。

私は、この家系への神の贈り物と言っても言い過ぎではないでしょう。その年は辰年でした。まったくの偶然です。暦の上では、私は本来なら幸福と繁栄をもたらすべき、まれな生れ合わせなのです。けれども、龍と辰の重なりが悪い結果になったのです。

いや、そんなはずはありません。

私の女系親族はマレーシアで暮らし、私自身は家族とシンガポールで育ちました。家では、だれにも「男なんだから、がんばれ」などとプレッシャーをかけられませんでした。考えられるとしたら祖父の影響だけです。

が、祖父は私の生まれる数年前に世を去っていました。なくなつたとき、家系の伝統に照らして、すでに孫がいるかのように名前を選んで墓石に刻みました。私が生まれたとき、両親は祖父を偲んで、墓石にすでに刻まれている名前を私につけたのです。祖先への畏敬の念が信じてに値するものなら、私の男性性は、いささかも崩れることなどなかったはずですが、しかし、残念ながら、そうはなりません。

それでは、学校の友だちの影響でしょうか。おそらく、それもちがうでしょう。私はミッションスクールの男子校に通っていて、私のような友だちはゼロ。一人だけ女っばいなんて、おもしろくも何ともありません。けれど、他の友だちには、こっけいなことだったので、みんなから「おとこおんな、半陰陽、おまえって、なんでそうなんだ」と声を合わせてからかわれました。

ひどいものを「プレゼント」されたこともあります。ゴキブリ、クモ、そして排水溝の中から見つけてきた気味の悪い生き物の類いです。

図書館で本の修理に使うような安っぽいベトベトした糊を、突然、頭の上からかけられて、ぎょっとしたこともあります。ヒュー。私は、あらゆる種類のいたずらの実験台にされたようなものです。（ちなみに、この「ヘアー・ジェル」は、臭いもひどくて落ちるのに何日もかかり、ようやく落ちたときには、髪の毛までごそつともっていかれました）男子のからかいとわるふざけと嫌がらせと言ったらもう……。

もう少しワイルドにならなくちゃ」と彼らは言うのです。荒っぽいことをして、男の生き方を私に教えているとも思っていたのでしよう。

もし、男友達からありのままに受け入れられていたとしても、私は友情としてではなくて、悪くすれば性的な興味に誤解してしまつたでしよう。（まったく、お笑い草です）

現実には、友だちから意地悪されたために、とんでもない方向に行つてしまいました。友だちから見捨てられた私は、次第に男ともだち、そのわるふざけ、そして男らしいものすべてから身を引いてしまいました。

それが高じて、ついには自身性の性からも引き裂かれてしまいました。男であることが、耐え難い痛みになりました。男であることが自分にはいけないこと、不自然なことでした。ゆるやかに崩れていく自分を止めることができず、ついには心が静かに死んでいったのです。

(次号に続く)

From the book FOC: Freedom of Choice by Leslie Lung © 1999. Used by permission. All rights reserved. レスリー・ルングさんの講演DVDを販売中(詳しくは、裏表紙をご参照ください)